

■ 授業者より

- ・本単元は、ネット型ゲームの入口として、メインゲームの難易度を下げて機能的特性を重視した構成になっている。
- ・「でこキャッチアタックバレーボール」は、今回考案したものである。
- ・事前の実態調査では、学級の児童35人中31人がバレーボールを経験したことがないと答えた。
- ・競技の工夫として、ネット型ゲームの醍醐味であるアタック（返球）を重視した。
- ・問題発見、予想、修正などの問題解決の過程の充実を図った。児童の振り返りを次の課題意識へとつなげられるようにした。
- ・子供同士が協働的に学び合うために、支えとなるような教師の関わりを意識した。
- ・単元のはじめに、「仲間に気持ちよくアタックさせるにはどうしたらよいか」という課題意識をもたせるために、ラリー無しでのアタックゲームを行った。
- ・問題解決の過程では、児童が仲間と学び合い、改善点を見付けられるように「チームタイム」を設定した。
- ・チームごとに見いだした改善点を基に、練習方法を選択できるようにした。
- ・ゲームでは、児童が審判を担当するようにした。
- ・ルールの改善アンケートの結果から、3時間目以降は、児童が現状のルールに満足していたので、変更はしなかった。

■ 研究協議（主なものを抜粋）

- ◆本時の「問い」について子供たちがどの程度意識していたのか。
→「トスの高さをどれくらいにしたらよいか」については、児童が考えやすい「問い」だった。「コートの中の位置を使うのか」については、イメージするのが難しいと感じた。共通課題について確認する場面を設定したり、振り返りの前にもう一度「問い」について話題にしたりすることで意識付けをしようとした。
⇒セッターの位置が定まらないことで、トスが上手いかわないことがあった。子供の課題意識と重ねながら活動を構成するとよい。
- ◆でこキャッチで一度止めて、ねらったところに上げることについてはできていない児童が多かった。特に「高さ」については難しくそうに見えた。下から投げるようにしたらうまくいく児童も多くなったのではないかと。
→でこキャッチの形でボールを扱うようにしないと、子供は自然にオーバーハンドパスの形にならないと考えた。トスの高さを出すことが難しいので、少しずつ挑戦していけたらよい。また、教師の言ったことをやりすぎてしまう児童もいたので、これ以上は修正をかけずに進めた。
- ◆ボールの大きさについて、児童によってボールの大きさが違っていいのではなかいか。それについて、授業で話し合うことはなかったのか。
→低学年用の軽いボールがあったが、基本的には高学年が使うボールを使った。子供たちと決めていくことを大事にした。
- ◆点数はどのように考えて決めたのか。
→ねらいを定めないと高得点に結び付かないようにした。
- ◆トスが上手くできない児童については、セッターの位置やアタックの位置を定めてあげることが必要ではないか。オフボールの子が好きに動いていいルールだったのか。
→もう少し段階的に進められる部分があった。でこキャッチを練習してからでこへディングをするなど、順序が逆の場合も効果があると思ったので試してみたい。

■ 指導助言

旭川市教育委員会教育指導課主査

五十嵐 敬 様

【成果】

- ・令和3年度の調査では、運動時間の減少、学習以外のスクリーンタイムの増加が指摘されている。その中で学校では「運動の楽しさ」を実感させることは重要である。
- ・本時の授業では、体育の授業への期待を膨らませる4年生の姿があった。
- ・【する・みる・支える・知る】などの子供同士の多様な関わり方を意識した学習が展開されていた。
- ・でこキャッチバレーボールについて、バレーボールの醍醐味であるアタック（返球）を軸に単元が構成されていた。
- ・前時でトスの高さが話題に出ているとき、思いやりをもった児童の言動について価値付けをしていた。
- ・本時における協働的な学びを実現させる手立てがあった。
- ・「三角形に立つとパスが取りやすい」ことを演示して、個人の「問い」を学級全体のものとしていた。児童の考えを引き出しながらも、実際のイメージをもたせるため演示していた。また、子供たちが探究する余地を残すために、あえて打ちやすいトスについては触れなかった。
- ・第4学年の発達段階を踏まえて、適切な環境設定により、子供たちの力が引き出されていた。ウォーミングアップでは、立ち位置についての確認が行われていた。
- ・昨年度のブルボールでアタックの楽しさを感じられなかった児童についても、今回の授業では楽しさを感じられたのではないかと。授業者がイメージしていたことが形になっていたと感じた。

【課題】

- ◆一人の児童の疑問を、学級全体の「問い」として課題意識を持続させることが必要だった。協働して「問い」に向き合いながら、課題解決をしていくための手立てについては、更なる工夫が必要だと考えられる。

■ 指導助言

北海道教育大学旭川校准教授

高瀬 淳也 様

【成果】

- ・今体育で求められている、【する・みる・支える・知る】を意識した学習であった。
- ・「先生、次は何をしてくれるだろう」という期待感を、児童が感じられる授業であった。
- ・競技は子供たちに教えるために生み出されたものではない。教材化するためには、内容的視点、方法的視点を考える必要がある。
- ・学習指導要領解説では、ラリーの楽しさを感じられるように指導することが求められている。一方で、今回はラリーを省いた指導計画として提案されたが、その中で子供たちの楽しそうに活動する姿が見られた。
- ・体育の学習では、児童がこれまでは学習したことを試合で出せないことが課題として挙げられている。本実践では、児童が練習したことを試合の中で使っていたと感じた。ガッツポーズをするなど競技を楽しむ姿が見られたことがよかった。
- ・オーバーハンドパスは子供の恐怖心をあおるものである。でこキャッチはその間の教材として適切なものと感じた。
- ・本時までの流れが示されていて意図が分かりやすかった。

【課題】

- ◆今日の授業では、児童に学ばせたかったことが多いように感じた。考えるべきことが複数あり、子供には難しかったのではないかと。「気持ちよくアタックするためのトス」について子供が選択することが多すぎた。これはボール運動にありがちなことである。一般的には、4年生は3段攻撃、5年生で助走をとったアタック、6年生でコースに打ち分けるなど、学年に応じた指導がある。